

しるしから成就へ

| | |
|-----|---|
| 著者 | 佐々木 哲夫 |
| 雑誌名 | 大学礼拝説教集 |
| 号 | 7 |
| ページ | 23-29 |
| 発行年 | 2003-03-31 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1204/00024632/ |

しるしから成就へ

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

マタイ福音書、第一章一八―二五節

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであつた。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によつて身ごもっていることが明らかになった。19 夫ヨセフは正しい人であつたので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切るうと決心した。20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言つた。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によつて宿つたのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」22 このすべてのことが起こつたのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであつた。

23 「見よ、おとめが身ごもつて男の子を産む。」

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。24 ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、25 男の子が生まれるまでマリアと関係することは

なかった。そして、その子^こをイエスと名^な付^づけた。

本日の礼拝テキストとして、マタイ福音書一章を開きました。朗読した箇所は、天使がヨセフに現れ、一人の男の子の誕生を告げる場面です。いわゆる、受胎告知の場面です。ヨセフの許嫁マリヤに対する受胎告知は、これまで、フラ・アンジェリコやエル・グレコなど、多くの画家によって描かれてきました。しかし、ヨセフに対する受胎告知は、「ヨセフの夢」と題された絵などが、若干、伝えられているだけです。

マリヤは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。

これは、マリヤとの結婚を控え、ごく普通の日常生活を送っていたナザレのヨセフに語られた受胎告知です。天使のこの言葉は、ヨセフを、約八世紀ほどの時代をさかのぼる時空の旅へ導きました。天使の言葉が、紀元前八世紀のイザヤの預言と関連していたからです。本日、私たちも、ヨセフと共に、預言者イザヤの時代へさかのぼる時空の旅に参加したいと思っています。

*

さて、イザヤは、「一人の男の子の誕生」を「しるし」であると告げております。「しるし」とは、

「あることを証明するための証拠」のことです。「見えないもの」を「形あるもの」に置き換えて証拠とし、伝えたい事柄を確信させる表現です。聖書には、「しるし」という言葉が、しばしば、登場します。例えば、旧約聖書の士師記には、ギデオンという人物が、天の御使いに対し「しるしを見せてください」と願ったところ、突然、捧げ物から火が出たと書かれています。捧げ物が燃えるという「しるし」によって、ギデオンは、神の言葉を確信しました。では、預言者イザヤが語る「二人の男の子の誕生」とは、一体、何を指し示し確信させようとしていたのでしょうか。

「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」というイザヤの言葉は、直接的には、当時のユダヤ人に語られた言葉です。当時、ユダヤ人の国は、南と北の二つに分かれておりました。特に、その南の王国のユダのアハズ王に語られた言葉でした。アハズ王について、聖書は次のように、記録しています。「アハズは二十歳で王となり、十六年間エルサレムで王位にあった。彼は父祖ダビデと異なり、自分の神、主の目になう正しいことを行わなかった」と記されております。アハズという王は、旧約聖書の民の王でありながら、背教者のような歩みをしていたのです。

*

さて、その頃の世界の超大国は、アッシリア帝国でした。特に、ティグラト・ピレセル三世が王位に就いていた時期、アッシリア帝国は、その領土を、ペルシャ湾からチグリス・ユーフラテス川

沿いの全地域、さらに西南方向、パレスチナ地域まで拡大する勢いを誇っていました。アッシリア帝国の勢いがパレスチナの地域まで及んだとき、北の王国イスラエルは、諸国と同じように、アッシリア帝国に貢ぎ物を納め、恭順の意を示し、辛うじて独立を保ったのです。しかし、数年後、近隣諸国と同盟を結び、アッシリア帝国に対決する姿勢をとりました。超大国と対決するには、南の王国ユダと同盟を結び、パレスチナの勢力を一つにする必要があります。しかし、ダビデ王朝の正統性を誇る南王国ユダは、そう簡単に、この同盟に加わりとうしませんでした。そこで、北イスラエルは、南のアハズ王を倒し、傀儡政権を打ち立てようと干渉したのです。それが、アハズ王が直面した国家存亡の危機でした。この危機に対し、アハズ王が取り得る政策は、三つあったと考えられます。第一はアッシリア帝国を宗主国とし救援を求めること、第二はエジプトと同盟を結びその支援を得て北からの干渉に対抗すること、第三は孤立無援のまま主に信頼し、独自の道を歩むこと、その三つでした。

この国家的危機に、預言者イザヤは、毅然としてアハズ王に進言したのです。預言者とは、神の言葉を預かり、民や王に進言する者のことです。イザヤは告げました。「ダビデの家よ聞け。あなたたちは人間にもどかしい思いをさせるだけでは足りず、わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」第三の選択、神に信頼し、独自の道を歩むこ

とを、イザヤはアハズ王に進言したのです。「落ち着いて、静かにし、恐れず」主に従うという政策を選択するよう進言したのです。この第三の選択肢は、人間の目的合理的判断に基づくならば、全く現実味のない政策でした。それ故、確信を与えるため、しるしが語られたのです。男子誕生は、神の言葉の確かさを保証する「しるし」でした。

男子誕生の予告は、跡継ぎを保証する約束、即ち、アハズ王朝の安寧を約束する「しるし」でした。確かに、後の歴史を参照するなら、アハズ王の子として生まれたヒゼキヤが、王位を継承し、しかも、彼は、聖書の記録によるならば、父のアハズ王のようではなく、「主の目にかなう正しいことをことごとく行い、…すべての王の中で彼のような王は…なかった」と称賛された王でした。しかし、ヒゼキヤとて、インマヌエルと呼ばれるべき完全な預言の成就、メシア到来とは見なされませんでした。預言者イザヤが告げた「しるし」の真の意味が明らかにされるには、さらに、八世紀ほどの時の経過を待たなければならなかったのです。

*

さて、イエス・キリストの誕生について、マタイ福音書は、次のように記しております。

このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するため

あった。「見よ、おとめが身をもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

本日のテキストの箇所です。マタイ福音書記者の主張は明確です。イエス・キリストの誕生こそ、イザヤ預言の成就だということです。イエスという名前は、ヨシユアというヘブル名がギリシャ語化した名前で「主は救い」の意味を持っています。ユダヤ人の間ではごく普通の名前ですが、確かに、御使いの告げた「自分の民を罪から救う」の意味が込められた名前でした。また、イエスの誕生は、これまで待望されていた「救い主」の到来であるとも考えられ「救い主」即ち「キリスト」とも呼ばれました。実に、イエス・キリストの誕生は、イザヤ預言の成就と認識されたのです。

ところで、預言者イザヤと福音書マタイの記事の間には、見過ごすことの出来ない相違が存在しています。既に見てきましたように、「男の子の誕生」は、イザヤ預言では「しるし」でした。しかし、マタイ福音書では、預言の成就そのものです。

イエス・キリストの誕生は、「新しい時代の到来を確信させるしるし」ではなく「新しい時代の到来そのもの」だったのです。「しるし」から「預言成就」へ転換する瞬間だったのです。ヨセフ

は、天使が語る言葉によって、預言者イザヤの時代へ旅し、この劇的な時代の転換を体験しました。そして、彼は、また、彼の日常へと戻ったのです。

ヨセフは眠りから覚めると、天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、…その子をイエスと名付けた。

しるしが、成就へと変わったのです。この出来事を、ヨハネ福音書は、「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」と表現しました。後に、使徒パウロは、弟子のテモテに書き送った手紙の中で「『キリスト・イエスは、罪人を救うために世に來られた』という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します」と証言しました。確かに、イエス・キリストの誕生は、救いの時代という新しい時の幕開けを告げる出来事だったのです。

*

私たちは、今、西暦二〇〇二年のクリスマスを迎えております。二〇〇二年は、しるしを求める時代ではなく、イエス・キリストを神の子として信じる時代に属しております。預言の成就であるイエス・キリストの誕生を共にお祝いしたいと思います。